

『中上健次と村上春樹』

〈脱六〇年代〉的世界のゆくえ』

柴田勝二著

東京外国語大学出版会 二〇〇九年三月

本書の基本的な視座は「あとがき」に簡潔に述べられているとおりである。「一見対照的に見える二人の作家が、見かけの差異を乗り越えて、基底的な次元で強い共通性を持ち合う例は少なくない」（三二七頁）。選ばれたのは中上健次と村上春樹である。この視座のもとで二人の作家を読み進めた結果、著者は次のことを結論する。「両者の人物たちは決して社会に対して迎合的であるわけではないが、少なくとも反逆者として自壊的に生きようとする行動者ではないことが斬新であり、そこに彼らの基本的な時代性が存するであろう」（三二八頁）。そしてこの「時代性」が、〈モダン〉の時代に根を持つ作家たちがかかえた「〈脱六〇年代〉的なポストモダン性」として把握されたのであった。

〈モダン〉に根を持つ作家たちが〈ポストモダン性〉と交渉するための仕掛けとは、中上健次の三部作（『岬』『枯木灘』『地の果て 至上の時』）における「秋幸」と「実父・龍造」、また、村上春樹の三部作（『風の歌を聴け』『一九七三年のピンボール』『羊をめぐる冒険』）における「僕」と「鼠」のように、主人公と副

主人公、すなわち主人公とその分身の仮構である。著者によれば、これらの分身たちは、二人の作家が脱却しようとする〈過去性〉を、いずれもおびている。中上健次の場合にはたとえば肉体性と暴力性とは付与された父・龍造、あるいは性の悦楽のさなかに男／女の性の位相の反転にさらされる男たち。いずれも旧文化を象徴する存在であり、同時にその相対化である。こうした反転によつて、主体である主人公はつねに他者化・他界化されて参照される。そしてこの主人公と分身が幾重にも参照しあいながら顕在化する「他者性」ないし「他界性」こそが、仮託された六〇年代の〈過去性〉であり、その〈過去性〉を参照することで他者性と他界性の顕在化をもたらすのが、〈ポストモダン性〉とその戦略なのだと言論するのである。本書の成果のひとつは、この〈過去性〉という時代性をつかみとり、そこに批評の陣地を設営したことである。中上健次と村上春樹が、巧みに物語を操り、説話性やアナグラムなどの意匠を凝らすさまに目を配りつつ、しかし基本的には〈六〇年代〉を脱却しようとすることに意識的な作家たちであることを、扱われていくすべての作品を貫いてつかみきつたところに、著者の辣腕がある。おそらくこの練達の技にこそ、蓮實重彦の説話論的・表象論的な批評や、ポスト構造主義的な〈差異〉の文学論をくりだしてきた柄谷行人、渡部直己らの先行する文学批評を相対化する、著者の真価がある。それは一方で時代性を基軸に中上健次や村上春樹を、特権化することなく文学史のなかに軟着陸させることであり、他方で文学の社会性を、文学の仕掛けを壊すことなく論じつくそうとする、テキストに即した文学批評の展開に向けた強い意志を發揮することである。

さらに問題提起的であるのは、ラカンを援用しながら提示される次の論点である。たとえば主人公とその分身という仕掛けを通じて作家は自己を社会化する。この自我の社会化・他者化は、しかしそれが「書くこと」によって遂行されるものであるかぎり、ラカンでいえば象徴界に位置する、文字の表記がもつ象徴的な去勢にほかならない。「書くこと」による文字化は欲望の実現であると同時に、その衰滅Ⅱ死の欲動の遂行でもあるからだ。このように考えれば、〈分身〉を生み出すこととはあらかじめ去勢のプロセスに入ることにはかならない。そして著者が慧眼にも指摘しているとおり、中上や村上の分身たちは書かれれば書かれるだけ「がらんどろ」に、無化に限りなく近づいている。著者はここに、〈仮託された過去〉が常にすでに去勢されているという事態を読み取る。それはまさに〈六〇年代〉的なものを葬りさるうとする欲動にほかならない。だがまた、ここで注意しなければならないのは、中上健次よりも、村上春樹の主人公たちが〈自己無化的な内面〉をより積極的に標榜して登場することだ。そしてこの〈自己無化的な内面〉は、村上そのひとが中国に対してしめす「かすかな負い目」と共振する。著者はこの「かすかな負い目」という身振りに、村上文学の自己無化や去勢のうちにあり、独特の作法をかぎとるのだ。「……そしてこの完了した対象として十分な距離を取りえない、現在の流動性に満たされた主題こそが、ここで捉えてきた、戦前から現在に至る日中関係の系譜にはかならない」（二四六頁）。中国侵略戦争に対する負債は、審議未了の自己否定の契機として、ここで同時代的な表出の水準においてとらえられる。それは流動性という視角から把握された社会性という

ことでもある。この把握によって、不断の去勢プロセスのなかで、「かすかな負い目」や異和を反芻し続け、そこに耐える主体がここで設定されるのである。この発見に加えて、中上の『紀州 木の国・根の国物語』と『異族』における天皇の内実の相違——後者における天皇の空洞化——の発見も、賞賛をこめて付け加えたいが、しかし中上のそれは主体の無化や空洞化を積極的な戦略とすることはない。村上春樹に一日の長があると著者が判断するのはこの点である。かくして、中上をみすえながら、村上の「内面の空白を断罪する一種の倫理性」（三二三頁）という主体、「自壊的な行動者」とならない、いわば観察Ⅱ投機 (speculation) 的な主体を据えるまでに至ったことで、村上春樹論のひとつの水準が達成されたのである。主体性をめぐる思想のドラマの一幕としても確認しておきたいところである。

〈六〇年代〉論をめぐっては、小熊英二の大著『一九六八年』上・下（新曜社、二〇〇九年）が記憶に新しい。小熊の大著に対しては、私も少なからず批判を提示しておいたが（拙稿『あの時代』の脱神話化、「図書新聞」二〇〇九年九月五日号）、それは世界革命という想像力の審級の把握にあらかじめ躓いたところに難点があつたと考えている。これに対して、本書は中上健次と村上春樹というふたりの形象に定着した〈六〇年代〉の想像力があるがままに格納しつつ、その反響のゆくえをみさだめることに成功していると考ええる。その意味で、ポスト構造主義的な批評理論に遊ぶことなく、文学史の成果をふんだんに用いながら、社会文学としての矜持を守り、良質の思想史としての役割も備えた、これはまことに手練の仕事なのである。

（友常勉）